

プレスリリース

藤幡正樹個展「E.Q.」

機材協力：キヤノンマーケティングジャパン株式会社

2019年7月6日（土） - 8月31日（土）

東京画廊+BTAP | 東京

〒104-0061 東京都中央区銀座 8-10-5 第4 秀和ビル 7階

TEL: 03-3571-1808 / FAX: 03-3571-7689

この度東京画廊+BTAP では藤幡正樹個展「E.Q.」を開催いたします。

弊廊では 1968 年に視覚をテーマにした展覧会を二つ行なっています。一つは見ることに疑義を呈する「トリックスアンドビジョン 盗まれた眼」展、そしてもう一つはイメージを新しいメディアからとらえた、CTG（コンピュータ・テクニク・グループ）による「コンピュータ・アート展：電子によるメディア変換」です。昨今の日本のアートシーンはメディアアートによって席卷されつつありますが、そのパイオニアとも言える藤幡正樹の今回の個展は、改めて視ることとイメージの関係を問い直すものです。

展覧会タイトルとなった E.Q.とは、Equalize の略語です。本来イコライズとは数学で左辺と右辺を等式化することですが、技術分野では歪んだ状態をフラットな状態に戻すことをイコライズと呼びます。メディアは必ず対象を歪めます。この歪みはイコライズ可能なのでしょうか？

本展で展示する作品では、高解像度カメラによってリアルタイムに取り込まれたイメージが、コンピューターによって座標変換され、プロジェクターで投影されます。そこに映し出されるのは鑑賞者の身体のイメージですが、物理的な鏡とは異なり、定着されないデジタルメディア上のイメージは常に移ろい続けます。視覚をテーマとして先鋭的な表現を追求してきた藤幡ならではのインタラクティブな作品です。

7月6日（土）16時よりアーティストを囲んでのオープニング・レセプションを開催いたします。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

東京画廊+BTAP プレス担当: 陳 威達
e-mail: info@tokyo-gallery.com / website: www.tokyo-gallery.com

開廊時間 | (火-金) 11:00-19:00 (土) 11:00-17:00
休廊日 | 日、月、祝

東京画廊+BTAP | 東京
〒104-0061 東京都中央区銀座 8-10-5 第4 秀和ビル 7階
TEL: 03-3571-1808 / FAX: 03-3571-7689
www.tokyo-gallery.com

E.Q.

Masaki Fujihata May 2019

水面に映る自分自身、壁の節穴が作る投影像、そしてレンズを用いたカメラ・オブスクーラが作る像。像はイメージと呼ばれ、簡単には物質として定着することができず、常に移ろいゆくものであったのだが、19世紀に写真術という化学と光学の結婚によって、それが可能になった。定着され得なかったはずの像（イメージ）が、定着できるようになったことで、見るという行為の意味が問い直されるようになった。

イメージの定着が写真によって完璧になされるようになったことで、本来は paint（塗装）に過ぎなかった絵画は、ますます picture（画像）であることに固執して、イメージの問題から逃れるようになった。わざわざ写真や絵画をまとめた呼称として、美術（Fine art）以外に、視覚芸術（Visual arts）という用語が必要になったのも、こうした背景があるからではないだろうか。しかし、現実的には時間を扱うメディア技術が急速に発達したことで、イメージの問題はますますおもしろい展開を見せている。

これまで記録することさえ難しかったイメージが、デジタル技術によって、光学的処理を経ない方法で記録再生できるようになり、さらに編集や改編が自由にできるようになった。ここでは、プログラムによってイメージが編集されるのだが、プログラムの根本にあるのは数学であり、問題を解く方法＝アルゴリズムによってイメージが改編される。このアルゴリズムでイメージを操作するデジタル技術というものは、写真などのイメージ操作技術とは、何かが根本的に違っている。

新しいアルゴリズムを作り出すと、同じアルゴリズムからほぼ無限のバリエーションを生み出すことができる。新たな作業手順＝アルゴリズムを創造することは、まさに脳内での創造作業であり、プロセスをイメージすることとそっくりである。作業手順のイメージが掴めないままに、作業に入ると大概は失敗することを僕たちは知っている。視覚イメージの生成における創造的なアルゴリズムは、これまでのイメージの世界に、メタなイメージ創造の次元を付け加えることを可能にしたのである。

しかし、視覚とイメージを直接に繋ぐものは、自分自身の身体でしかない。起源は水面に映った自分の姿であり、近代以降は鏡ということになるだろう。鏡に直面した人は、身体を使うことによるのみ自分自身の視覚イメージを獲得することができる。そこには物理的な関係性と光学的な関係性しかない。ところがデジタル技術が介在することで、イメージの複製に無限の可能性が生まれてしまった。人が初めて鏡を見た時のこと、初めて自分自身が写った写真を見た時のことが、やがて了解事項となって疑義を挟まなくなってしまうのは違って、この定着されないデジタルメディア上のイメージは無限にうつろいながら、無限に疑義を呈するのである。

会期中、アーティストを交えてのトークイベントを以下の通り開催いたします。定員 30 名の予約制とさせていただきます。件名に「o/△ トークイベント 予約」、本文に「(1)氏名、(2)電話番号、(3)E-mail アドレス」をご記入の上、下記まで E-mail でお申し込みください。

E-mail: info@tokyo-gallery.com

7月20日(土) 15:00~16:30 アーティストトーク 藤幡正樹

展示作品「E.Q.」のコンセプトとその背景について、作家自らが語ります。作家にとっての重要な問題意識として、技術の暴力とイメージに対する人間側の姿勢というものがあります。これまでの絵画史の中でイメージをテーマとしているとおぼしき作品、逆に近代以降、絵画と平行して進化してきたイメージの技術史について語りながら、視覚経験を Picture と Image にわけつつ自作との関係性を語ります。

7月27日(土) 15:00~16:30 ディアログ・イベント

ゲスト：黒瀬陽平（美術家、美術批評家）

モデレーション：藤幡正樹

家電、漫画、アニメ、その後のいわゆるオタク文化などの文化現象と日本固有のアートの動向は切り離せない関係にあります。これまでのよう教養主義的なアートのあり方ではない、より実践的なアートとの関わり、あるいは技術と表現について、次世代の視点を持ったゲストと議論します。

黒瀬陽平 | くらせ ようへい

1983 年生まれ。美術家、美術批評家。ゲンロン カオス*ラウンジ新芸術校主任講師。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。博士（美術）。2010 年から梅沢和木、藤城嘘らとともにアーティストグループ「カオス*ラウンジ」を結成し、展覧会やイベントなどをキュレーションしている。主なキュレーション作品に『破滅*ラウンジ』（2010 年）、『カオス*イグザイル』（F/T11 主催作品、2011 年）、『キャラクラッシュ！』（2014 年）、『カオス*ラウンジ新芸術祭 2017「市街劇 百五〇年の孤独」』（2017 年）など。著書に『情報社会の情念』（NHK 出版、2013 年）。

8月21日(水) 18:00~19:30 ディアログ・イベント

ゲスト：Yuk Hui（哲学者）

モデレーション：藤幡正樹

アートという概念が、西欧中心に発達してきたことは否めない。その前提で今アジアにおいてわれわれがアートに対していかなるアプローチを取ることができるのか？ 現在もっとも活発で、驚くべき知性を持った香港出身の若手哲学者 Yuk Hui を迎えて、技術の問題、アジア文化の問題について、ディスカッションします。

許煜 | Yuk Hui

香港大学とロンドン大学ゴールドスミスカレッジで、テクノロジー哲学を中心に、コンピューター工学と哲学を研究。2012 年以降、ロイファナ大学リューネブルク校の Institute of Philosophy and Art で教鞭をとり、現在は香港市立大学メディアセンター准教授、および中国美術学院客員教授。



藤幡正樹 Masaki FUJIHATA (1956-)

日本のメディア・アートのパイオニア。80年代のコンピュータ・グラフィックス作品《Mandala1983》等で、広く知られることになる。90年代に入って、今ではすでにインタラクティブ・アートの古典ともなっている《Beyond Pages》、ネットワークをテーマにした作品《Global Interior project#2》等を発表。デジタル空間と現実空間の往復と接続に興味を示す。

同時期にはじめた GPS を用いたプロジェクト《Field-works》シリーズは、独自のアプローチによって取得されたデータを、制御されたサイバー空間に展開したもので、この「映画の未来形」とも、「メディアの進行形」とも言える、この新しいプロジェクトは、他者の追従を許さないものがある。これまでに 10 を越えるプロジェクトが、世界各地で実現されたが、2012 年にフランスのナント市で実現された《Voices of Aliveness》は、自転車に乗る参加者の叫び声をサイバー空間へと集約したもので、このシリーズの代表作である。

2016 年に AR (拡張現実感技術) を用いた自身のアーカイブ《anarchive °6》がパリで出版される。2018 年には、50~70 年代の香港に焦点をあて、AR を用いて過去が現在に並列化されるパブリックアート・プロジェクト《BeHere》を実現。

1996 年、アルス・エレクトロニカ (リンツ、オーストリア) で日本人初のゴールデン・ニカ賞、その後も複数回受賞。2010 年文化庁「芸術選奨」文部科学大臣賞、2016 年紫綬褒章。

1989 年から慶應義塾大学環境情報学部、1999 年から東京藝術大学美術学部先端芸術表現科、2005 年から同大学大学院映像研究科の設立に参加後、2015 年早期退職。2017 年にリンツ美術大学 (オーストリア)、2018 年香港バプティスト大学客員教授。